

幼児期における運動遊びと環境の関係

曾 和 光 代

はじめに

幼い子が、じっとおとなしくしているのは却って身体の調子でも悪いのではないか、と思ってしまうほど、幼児はじっとしていない。電車の中でも5分もたない。車内を走り回り、座席では座ってはず、立ったり、跳びはねたりする。注意をしなければ運動会が始まりそうである。公共の場では人の迷惑、危険な場所への配慮等の点を考えると、無条件に子ども達の活動を認めるわけにはゆかないが、公園や園庭で遊んでいる幼児の姿をみると身体を休めている事がなく、活動的に遊んでいるのは見ていて心が和む。

どこも身体的に悪くなく、安心して見守ってくれている保育者（母親や父親、保育指導者）がそばにいる。この条件がととのうと、幼児の情緒も安定してくるので、自分自身をとりまく世界へ積極的に入ってゆき、自分の興味のある物には、「やってやろう。」と好奇心が湧き、活発に体を動かしてゆく活動意欲が育つ。もちろんその活動意欲をかきたてるには、幼児をとりまく周囲の環境が整っていないなくてはならない。第一に遊び場はもちろんの事であるが、遊び仲間も必要となってくる。子どもが育ってゆくなかで環境が与える力は大きく、環境の善し悪しは子どもの成長してゆく方向を大きく変えてしまう。子どもの発達によりよい影響を与えてより良い事態をつくってゆくのは我々大人の責任である。母となり良き指導者となるためには今日の社会の変化、事態に対応する教育のあり方が求められている。一人の人間が育ってゆくにはより多くの人々と係りを持ち、それらの人々に影響されて人格形成ができる。人間が社会生活をしている以上、人との交わり係わりを外して生きてゆけない。保育者や指導者は特にこの幼児期に良い環境の中で幼児に多くの人々と係れる機会をつくり

だしてゆく義務がある。

幼児をとりまく環境

幼児期に遊びを中心とした運動が発育発達に必要な事はいうまでもないが、今日の社会と運動遊びの状況の変化は著しいものがあり、高度経済成長のおかげで都市化現象により人口が都市に集中流動し、産業発達による職場中心の生活、核家族化、人間関係の構造の変化、道路政策による他目的広場の減少、等が遊べる場所を少なくしている。又、子どもの数の減少による遊び友達が少ない。等の環境もつくっている。このことが、子どもの遊びの文化の質を変えざるをえなくなった。

運動不足による子どものゆがみは、中枢（脳）の神経系の発達を阻害する結果となるといわれ、こけても手がでない、顔を怪我する。手先が不器用、骨折をしやすい、足の裏の土ふまずの発達が悪い。等に表れ、土ふまずは6～7歳で発達するが運動発達段階に十分に運動遊びをしていないと発達せず、精神的には、屋外での遊びや身体活動の減少は性格に影響すると考えられ、外での遊びや、運動遊びにより、遊びを思考したり、遊びに夢中になったり、友達ができ自分の世界が広がってゆく。活動が高まり情緒の安定へとつながってゆくものと考えられる。

今日の環境を考慮して幼児教育に携わる幼稚園や保育所等では子ども達の運動遊びに工夫をこらし、園では素足になり遊ぶ、素足での竹馬のり、かんげたのり、等を行い、身体全体を鍛えるための乾布摩擦等も実施している園もある。それぞれの園で子どもの発達段階に応じて身体づくりの工夫がなされている。もちろん竹馬がてきたから、素足で走ればよい、という部分だけをとらえて子どもが成長し発育、発達をとげていると見るものではない。今日の幼児をとりまく環境の変化は個人の能力の範囲を越えており、遊びの空間の減少や、知的発達の未熟な幼児では考えられない遊び道具がマスコミや企業の商戦により我々の目にとまる。子どもの生涯にわたる発育、発達を無視した目先だけの効果を

ねらったもの。情報だけが優先し、いかにもそれを幼児期に与える事が最も良い事であるような宣伝には迷わされないようにしなくてはならない。

幼児をとりまく環境にはまず家庭環境がある。父母、兄弟姉妹、祖父母等とのかかわり。次に教育機関である。幼稚園や保育所での環境があり、ここでは家族とちがった保育者や、友達とのかかわりがある。三番目には地域社会環境がある。近所のおじさんや、おばさん。友達等のかかわりがある。これらの環境の中で幼児は基本的な生活習慣、人間らしく生きてゆく力を身につける。

この三つの環境と運動遊びの関係を述べてゆきたい。

I 教育の場と運動遊びの関係

幼児をとりまく環境の変化により、幼児にふさわしい生活体験が得られにくくなってきたのを踏まえ、25年ぶりに幼稚園教育要領の改訂となった。新教育要領の施行は平成2年4月より始まった。

幼稚園や保育所が今まで以上に幼児期にふさわしい生活体験の場所となり、幼児が主体となり生活の場を展開されることを目指している。園における生活や遊びにおいて幼児の主体性を十分に発揮できることが重視されている。又、幼児は、生活そのものが遊びであり、遊びを通して、さまざまなことを学習してゆく自立への出発点である。まわりの環境の刺激を受け、心身共に発育、発達を遂げる時期なので幼児教育の場での環境構成に創造、工夫が求められる。

幼稚園での体育という考え方

新教育要領では、幼児にとってどのような面が育って欲しいかを、発達の側面からとらえて5領域に示している。

- ① 「健康」心身の健康に関する領域
- ② 「人間関係」人とかかわりに関する領域
- ③ 「環境」自然な身近な環境とかかわりに関する領域
- ④ 「言葉」言葉の獲得に関する領域

⑤ 「表現」感性と表現に関する領域

以上である。

ここでは、主に幼児の運動に関連する領域「健康」について述べると、領域「健康」が小学校の「体育」にあたるというものではない。

「幼稚園教育における指導の基本方針」は小学校教育と異なり「教科」という考え方ではない。したがって「体育」をいかに考えるか、については大変むづかしい。他の領域と切り話して考えることができない。生活そのものが遊びである幼児期に身体的活動だけをとらえて「体育」とは言えず、しいて言うなれば身体活動の中の運動遊びの指導ということになるだろうか。つまり遊びを通しての運動指導ということになるであろう。もちろん他の領域と切り離して考えられるものではない。「鬼遊び」を一つ例にとってみると、小学校ではゲームとして取り扱っており、ねらいも「誰とでも仲良くし、楽しく遊びやゲームを行い、健康、安全に留意して運動ができるようにする。」となっている。もちろん幼児期にも関わりのある事柄であるが、幼稚園の場合ねらいはもっと基本的なところに置かれていると考えられる。「鬼遊び」を通して、仲間との係わりの中から言語の発達や、仲間との係わりを持つことによって積極的に活動意欲を湧き起こし自らその活動の中に入ろうとする人的環境への開拓心を養う。遊んでいる内に「ルール」ができ、小さな社会ができる。空間や方向、位置関係の把握等が身につくと考えらる。これらは心身の発達を促すため、その経験する活動が幼児にとってどのようなことが身につき、学び、心身の発達にどのように刺激するかを踏まえた上での指導でなくてはならない。

工夫して走るという活動の中から色々な「ねらい」が考えられる。

- ① 追いかけてっこをしながら友人と戯れを楽しむ。人との係わり。
- ② いかなる方向に向かって走れば良いのか。機敏な判断。
- ③ 工夫してルールを変えてゆく。
- ④ 捕まった友達を助けてやる。
- ⑤ 安全地帯で休める時間（10を数えるまで休める等の数量的なもの。）

等が「ねらい」として考えられる。

「鬼遊び」を通して何が幼児に身に付くだろうか。という事を考えると、鬼からはやく逃げたり、鬼になれば、はやく追いかけてたりして、走力を身に付けることにより「鬼遊び」をすることにより付随する色々な事柄が心身の発達に影響を及ぼすというのが「ねらい」である。

生活の中で意欲的に運動することによりさまざまな動きを体験をし、その中から危険や安全に対する知識が体験となって身に付き、思いきり身体を動かした後の休養のとり方や、汗をかいた時に身体をふいたり、汚れた手や足を洗って清潔にしたりすることで、自分自身の健康へとつなげてゆける。このことは生活習慣の基礎となるべきものであり、生涯にわたっての健康へとつながってゆく。

領域「健康」において、幼児期は心と体が一体となって形成されてゆき、健康はあくまでも心の安全を基盤にして体を自由に動かすことが基礎になって成立するとされている。したがって幼児期には自ら活動しようとする心の安定が持てる環境が大切であるということになる。特に幼稚園や保育所では人的環境である保育指導者に幼児の心の安定がかかってくる。幼児の活動をやさしく見守り時には援助の手をさしのべられるように、幼児一人一人の心の中に存在していなくてはならない。

II 家庭の場と運動遊びの関係

兄弟姉妹が少なくなって一家族での子どもの人数が多いところで3人位であり、2人が平均的である。兄弟が多く近所同志よれば10人位の子どもはすぐに集まって遊べた時代ではなくなっている最近、親が子どもに係わる時間が多くなった。親自身も子どもの人数が少ないので教育面や遊びにおいても十分に心くばりができる。その反面、子ども同志の間で生まれた遊びや社会性は発達せず、与えられたものを消化してゆくには慣れ、受身の子どもが育ちやすい。初めての集団社会、幼稚園や小学校へ上がるまでは、特別な場合をのぞいて、親の手の中にその発育、発達が委ねている。特に幼児期では母親との係わりが

生活の大半をしめるので、母親が出不精であれば3才位までは幼児が一人で遊びに出ることはないので一日中、屋内で遊ぶことになる。その逆は、山や海、公園とつれだしてもらえ幼児自身の行動範囲も広がってゆく。

幼児期に身体を動かす事、運動遊びが発育発達に必要な事は十分に周知のことである。もちろん日常生活の中で静かに本を読んだりする事も大切であるが、幼児期は特に理論より実際に体験することの方がより大切である。幼児期の養育が母親の手だけにかかっているわけではないが、幼児をとりまく環境のちがいで砂遊びや水遊び、小さな動物にも接することなく絵本の中だけで終わってしまうのは、子どもの成長にマイナス面を与えてしまうのではないだろうか。子どもが1人で遊びにゆける、安全な環境を持たない現在、親がその役割りを果たさなければならない。安全で幼児が十分に身体を動かし楽しめる場所へつれだして、共に遊び見守ってやれるところへ出かけてみる。近所誘い合わせてゆけば、1人の子どもが2人、3人と増えて子ども同志で遊ぶことができる。一家族の子どもの人数は少なくとも寄れば子ども集団が生まれる。

a 外遊びにつれだす機会をつくる

親に依存している幼児期、この時期に親の養育態度は大きく子どもの生涯に影響することは言うまでもない。子どもが安心して積極的に物事に取り組む心や態度を育ててやるためには、子どもの身近にいる親、特に母親が積極的に物事に取り組む態度を示さなくては子ども自身もそうなりえにくい。周囲の環境に感化されやすい幼児期、親の背中を見て育つのである。親がゴロゴロしておればそれを模倣して子どももゴロゴロしているであろう。できるだけ多くの人々、家族とは異なった世界を知る機会を親がつくってゆかねばならない。子どもの豊かな成長を願うならば、何人もの友や、よりよく育ててくれる多くの人々に巡り会うことである。そのためには家の巣の中にいたのでは強くもならず弱々しい消極的な子どもになる可能性がある。「かわいい子には旅をさせ」という諺があるが、幼児期はこの旅立ちまでの礎である。基礎工事が十分にできていないと、その上にいくら良い材料を積み上げても崩れ落ちてしまう。親はこの

時期、いかに子どもにとって、目先のことだけでなく生涯に渡ってのしっかりした礎を築ける環境を作りだせるかにかかっている。巣立つまで、子どもには発育、発達に必要な多くの体験と経験を積ませたいものである。

具体的にいえば、お金をかけて子どもを旅行につれていったり色々な習い事をさせたりという事ではない。子どもが集団生活（幼稚園、あるいは小学校）に入る前は親子一緒に運動することを楽しんでほしい。親子で近くの公園や空き地、近くの小学校等の校庭に出かけ、歩くことのたのしさ、親子でかけっこする楽しさ、芝生でころがる、木の周りで鬼ごっこや隠れんぼをする、等々、楽しく遊べることはいくらでもある。よちよち歩きの幼児ならば外へつれだしてもらえるだけで十分に子どもは楽しいものである。親ものんびりした気持ちでゆったりと接したいものである。外遊びに連れ出してやれば、子どもは子どもなりに違った発見をする。石ころ、小さな生きもの、木の葉、砂、水、等の事物に何らかの感情を持ってくれる。その内、同じように外遊びに連れ出された他の子どもにも巡り会うことにもなる。天気の良い日は少し家事をそこそこにして、子どもの年齢に応じて親と子の接し方は変わってゆかなくてはならないが、親子で運動遊びやスポーツを楽しめる年齢（3歳位）になれば、地域の情報を集めて、安全に運動を楽しめるスポーツ施設等に親子でかけてゆくのも良い。プール等は親子で水遊びが楽しめる良い施設ではないだろうか。水馴れを幼児期に充分にしておくことは将来水を恐がらない事にもつながり、陸上だけでなく水上へのスポーツへと広がり生涯への趣味へとつながることも可能になる。親子のスキンシップということも含まれるので、水泳教室へ子どもを入れて泳方を習得させるのも良いがその前に充分に親子で水馴れのための水遊びを楽しんでほしい。この段階では親が泳げる泳げないは関係なく、いかに親自身が幼少期にかえって水遊びができるかに、かかっているからである。親自身が子どもの頃にやって楽しかったことは多分子どもにとっても楽しいことであろう。より多くの活動の場を広げてやるのは親の役目でもあり、子どもが将来何を生きがいとするかの選択の幅を広げてやれることにもなる。

b よりよき親子関係

幼少期の間の親と子の関係が子どもの一生の決めてとなり子どもが大人になった後も子どもとの良い関係を保ち続けるために大切である。子どもが親の保護下にあり成長と共に親の依存から離れ、自我に芽はえ自立してゆこうとする。幼少期から少年期にかけては子どもにとっても親の保護や親の依存のもとで健やかに成長してゆくのであるが、あまり親の保護が過ぎると、逆に抑制が強かったり、放任しすぎも、正しく自主性や自立心がつかず、親の養育態度が子どもの成長に応じてバランスがとれているかが、子育ての基本となるであろう。甘やかしすぎていないか、厳しすぎていないか等、親の自己評価も必要になってくる。自主的な心と自立心が年齢と共についてくると、親は肉体的に老化してゆく、やがて子どもが自立独立すると、親も年老いて身体的には子どもの保護のもとに生活し依存してゆくのである。しかし、精神面においては親の人生経験の深さ広さにはなかなか至らず、親にかなわぬ面を残しながら親子の良き関係を保ち続ける。いくつになっても親が生きている限り、親から人生のアドバイスを受け小言の一つも聞かされて、しかたなく「親にはかなわない。」という思いを誰しも持たれた経験があると思う。

最も良い親子関係が生涯に渡って続けてゆける決め手となる鍵は幼少期から少年期の親子関にあるといわれている。

c 親と子が一緒にスポーツを楽しむ意義

幼児期に活発に身体活動をすることは中枢神経の発達に役立つことは周知されている。子どもの発育、発達のためにも子どもが十分に安心して遊べる環境を親は考えなくてはならない。親子で出かけ、子どもと遊ぶことは親の運動不足の解消にもなる。子どもにとっては健康や体力の増進にもつながるであろう。親子で運動を楽しむ中で、子どもは親子関の楽しいつながりの中から安定した情緒が育ってゆく。親子のつながりを深めるためにもプラスになり、子ども自身も「やってみよう」という挑戦意欲をかき立てられる。これが子どもの活動意欲や運動意欲につながり、自立心、自主性がそれに伴って育ってくることに

なる。幼児期は親自身が楽しそうに動いている姿を模倣しながら運動するのが初まりである。子どもが周りの環境から得た情報の中から自発的に何かの動きを模倣しはじめ、これが身体表現となって運動遊びにもつながってゆく。この時に親も一緒になって子どもの動きや、する事をほめてやったり自分も一緒に身体を動かして楽しんだり、子どもの動きを見守ったりしながら、子どもが危険な状態や困っている時等はいつでも援助の手がさしのべられる状態にすることが望ましい。子どもが自発的に動き出すことを大切に子どもの自主性、主体性を引き出し、子どもが何に興味と関心を持ち活動意欲にもえてゆくか、親もきちんと受けとめおくことが大切である。

子どもは親の情緒が安定しておれば子どもの情緒も安定してくる。情緒が安定してくると子ども自身も活動意欲や運動意欲がわいてくる。この意欲を身体活動へとつなげ、親子で運動を楽しみ、身体をおもいきり動かし遊ぶことは、心も身体ものびやかになり、心身共にすくすく育つわけである。

子どもが成長してゆくための教育は単に教育機関である幼稚園や保育所、学校に任せておくものではなく、家庭での教育が基礎であり、この基礎の上に家庭以外から得た知識が積まれてゆき、大きな単位の世界へとつながり社会人として成長してゆくのである。

Ⅲ 地域の間と運動遊びの関係

ここでは地域の方々のために施設開放した体育講座の様子を中心に述べたい。本学付近の住民の家族がよっての運動遊びである。教育の間とも家庭の間とも違った環境である。

幼児期において運動遊びの必要性を述べてきたが、実際におもいきり身体をうごかせる環境におかれると子ども達はビッショリと汗をかくぐらい動きまわる。施設や用具の利用の仕方も大人が考えるよりおもしろい発想をもっている。大玉ころがしの競争を初めても自分が気にいればどンドン軌道からはずれて、遠くまでころがしてゆき帰ってこなくなることもある。しかし、その幼児自身

は一生懸命汗をかきながらころがしてゆくのである。他の子も又、それを追いかけてゆき、そこからかけっこが始まる。体育館のわきに置いてある大人用のとび箱も山の代わりに山登りが始まる。これは本学で行っている親と子の運動遊びの様子である。

平成2年10月より週一回3、4歳の幼児を対象に始めた「親と子の体育講座」も今年で3年目を迎え、大学の施設を地域の方々に開放する意味でも、本学の施設を利用していただき親子で身体を動かし運動する楽しさを味わっていただきたく、子ども達には集まった仲間と共に運動遊びの楽しさを味わって、自発的に活動してくれる事をねらいとして始めた。当初は3歳以上の幼稚園へ上がる前の幼児を対象としていたのだが、母親について弟や妹も一緒にやってくるので年齢層に幅ができ、おしめをかかえてよちよち歩く幼児も一緒になっての運動遊びである。休みの日ともなれば家族で運動を楽しみにこられる。

内容は前半、親子で楽しく体操やボール遊び、体育用具を使ったサーキット遊び、鬼遊び等で身体を動かしていただく。後半は親は親同志でスポーツを楽しんでもらい、子どもは子ども同志で鬼あそびやボールあそびを楽しめるように組んでいる。

開始は本学の行事の都合により5月の半ば過ぎより始めている。

初めの内は親のそばを離れられなかった幼児も10月頃になると親から離れて仲間同志で運動を楽しむことができるようになる。この時には子どもの目から見える位置で親は親同志で別のスポーツを楽しんでもらう。もちろん子どもの発育、発達段階のバラツキや年齢差もあり、皆んなが皆んな親から離れて子ども同志で運動遊びができていないわけではない。無理に親から離すのではなく、子どもが無理なく親がいなくても自発的に仲間に入って来てくれるのを待つことにしている。子どもが親を必要としている場合は親子で運動遊びをしていただくことにしている。しかし、その逆があり、親が子どものことが心配で自分自身も親集団の中に入れず、子どもと運動遊びをする。この場合一番こまるのは、子どもと一緒に運動を楽しめず傍観的立場で我が子に口だしされるのは、子どもにとってかえってマイナス面を残す。子どもは仲間と楽しく活動してい

るが親が子離れしない例であ。

親と子が一緒に身体を動かした後に30分位、親子離れてそれぞれの運動をたのしんでもらうことにしている。4歳児になるとこの30分を仲間同志で楽しんでもくれる。開始の5月から毎週参加している子どもと途中から参加した子どもとでは差が生じる。環境に慣れるまで幼児にとって初めての集団なので参加した回数は大きく影響する。2年、3年と続けて参加している幼児は、自発的に体育館に入ってくればもう活動がはじまる。体育館に用意してある、ボール、フラフープ、なわとび、タイコ等を取り出して自主的に遊び始める。とは言え、まだまだ幼いので何か不都合な事が生じれば親の姿を捜しまわる。親がいれば又、安心して活動が始まる。最終の3月ともなればもうなきだす子どもも少なく一人遊びよりも友達と係わりを持ちたがる。初め泣いていた子どもも自ら進んで活動を始めだす。この施設開放で何らかの成果を上げているのではないだろうか。

この親と子の体育遊びにおいても、体育施設や用具をつかっていただき、楽しく身体をうごかし運動することの楽しさを親子で味わっていただくのが目的である。しかし、進めてゆく内に親の期待が先に走り技術面の向上を急がれるのには閉口する。「はえば立て、立てば歩めの親心」と昔から言われているが、親が子どもにかかる期待の大きさが次から次へと高くなってゆく。発育、発達段階を考えないで技術向上の方向へ進めるのは子どもの能力や意志が無視されこの講座の意味がなくなり逆効果となる。この講座では基本的な運動能力である走跳投が主となる運動遊びが中心であるが、あつかう運動種目の特性をいかして、遊びながら無理なく、跳び越したり、跳びおりたり、ぶらさがったり、回転したりして、姿勢制御能力を身につけられるように、ボール遊びでは人の動きやボールの動きに反応し、予測し判断する能力を養えるように計画は立てるが、あまり技術面を追求しないで仲間とのふれあいを運動遊びを媒介として体験してほしい。したがってこの講座に参加したからマット運動ができるようになった。サッカーができるようになったというものではない。他の子ども達と比較して発育発達を見てゆくのではなく、時には個人の能力に応じて自ら考

え活動しているのを観察することも必要であると考え。親がにこやかに子どもを見守りながら自ら運動を楽しんでいる親子は子どもも自発的に運動を楽しんでいる。親が傍観的な立場で口だけ参加の親子は子どもが何かでつまづいた時に、泣きだし活動を停止してしまい親から離れなくなる。

情緒の安定している親は子どもも情緒が安定している。



プレイバルーンを親子で楽しむ

「親と子の体育講座」よりえたアンケートの結果。

次に、この講座で親は何を求めているのかこちらの意図と受講者側の意図とのくい違いがないかアンケート結果をまとめながら述べてゆくと、

1990年度受講の親13人に解答を求めた。質問は大きく3つとした。

1. 親と子の体育講座への期待
2. 講座内容について
3. 受講された結果どうであったか

以上を最終日に参加の親に書いてもらった。この講座では30組近くの親子が登録しているが施設や用具、人材の関係で15組位がベストと考えている。家庭の事情や子どもの調子等の事がからみ参加者はまちまちである。平均18組の親子は参加している。

問1から整理してゆくと。

この体育講座への期待は下記のような件数であった。解答は複数解答である。

- ① 集団への適応性や協調性を養って、仲間や友達との交流を持つ。 8件

- ② 親ばなれ。 6件
- ③ 運動遊びをしながら積極的な子どもへと育ててほしい。 5件
- ④ 親子のスキンシップ。 3件
- ⑤ 身体を動かす楽しさを知ってほしい。 2件
- ⑥ 体力をつけたい。 2件

以上であったが、①②は関係があり、親からはなれて友達と遊べたり、同年齢の友達との交流を期待している。幼稚園や小学校へあがる前に集団への適応性を願う親心であろう。積極的な子どもに育ててほしいのも親ばなれをして自発的に活動をする事をのぞんでいる。④親子のスキンシップの件数が少ないのは以外であったが⑤身体を動かす楽しさを知ってほしい。の中で親子のつながりを深める。親子で身体を動かすことの楽しさを期待したとの解答であった。⑥体力をつけたい。に関しては身体が弱いので運動をして体力をつけてやろうという親心であろう。

問2については質問のし方が悪かったのか、問3と重複するような答えがかえってきた。

- ① とても楽しかった。よかった。 2件
- ② 親のプログラムまで組んであって楽しかった。 2件
- ③ 場所ものびのびと広く、用具の種類が多かったので良い機会を与えてもらった。 2件
- ④ 強制的に親子を離さなかったのが良かった。
- ⑤ 内容が変化にとんでいた。
- ⑥ 学生リーダーと一緒にやってくれたので子どもたちにとってよかった。
- ⑦ 子どもの接し方が頭でわかっているけどなかなか理解できなかったが子どもの活動を認めてやるこつが少しわかった。
- ⑧ 家では叱ってしまうがここでは親子でのびのび楽しめた。
- ⑨ 子どもは友達ができ楽しんでいた。
- ⑩ 下の子どもよろしくお願ひします。

以上、①にいはしてはどのように内容がよかったか聞きたかったのだが、楽し

かった、よかったとの解答で終わっていた。②については子どもたちは学生リーダーや仲間達同志で運動遊びを楽しみ親は親同志でテニスやソフトバレー、バトミントンを楽しんでいた。③については体育館（バスケットコート二面）運動場等の場所での実施、用具は、各種ボール、とび箱、平均台、マット、トンネル、プレーバルーン、等を使用した。④については親子無理には離さず子どもが親を必要とする場合は一緒に活動していただいた。⑤については季節によって内容を変え、子どもの発達に応じて変えていった。⑥については、母親以外の人と、接することを喜んだ。⑦以下については問3の解答とも考えられる。⑩については少し違った解答でお願い事である。

問3についても複数解答で返ってきた。

- ① 友達と同じような事をして共に楽しむというルールがわかってきた。
- ② 友達ができ親なしで遊べるようになった。
- ③ 親離れしてくれた。
- ④ 人見知りがなくなった。
- ⑤ 親から離れて学生リーダーと運動を楽しんでくれた。
- ⑥ 友達の方がよく、親離れしてくれた。
- ⑦ 友達を意識し初めた。

以上は他の者との交流やかかわりのあらわれであろう。

- ⑧ 自己主張がしっかりしてきた。
- ⑨ 「まけるものか」の意識ができ自分で一生懸命にやるようになった。
- ⑩ 親をたよらず積極的に行動ができるようになった。
- ⑪ 自分から進んで体育遊びに出かけようといきたがった。
- ⑫ 準備体操を子どもの方が早くおぼえてしまった。

これらのことから、子どもが主体的に活動しようという意識がわき始めたのではないだろうかと考えられる。

- ⑬ 運動する楽しさ、体を動かすことが好きになった。
- ⑭ 外遊びが好きになった。
- ⑮ 走ることが好きになった。

⑩ 親子で楽しんだ。

⑪ のびのびと走り回ってくれた。

これらからは身体を動かすことの楽しさを味わってもらえたように思われる。

⑫ 片足ケンケンが上手になった。

⑬ 運動ができるようになった。

⑭ 返事ができるようになった。

これらからは、子どもに何かできるようになってほしいと親の期待の結果の解答であろうと考えられる。

その他、

⑮ 集団の中でもやはり3歳児は一人遊びの延長である事を感じた。

と書かれた母親がいた。自分の子どもが他の子どもと一緒に遊ばないので親子でこの講座に参加されたのであるが、子どもが一人で遊び仲間同志遊ばないのは自分の子どもが消極的なのではないかと感じておられたが、それがこの講座で子どもの発育発達段階によって遊びの集団、仲間意識の違いを理解していただき、他の3歳児も同じ様な発育発達段階をへている事に気づかれた。

以上がアンケートの結果である。この講座の目標からは外れてはいないようには思われるが、内容的にもっと検討しなくてはならないと考えている。

おわりに

現代の幼児の遊び仲間については、

1) 遊びと一緒にゆくのは親（大人）である。

この場合幼児の行動は受身になりやすい。

2) 子ども同志（兄弟姉妹）上下関係で遊ぶことが少ない。

同年齢の子ども同志で遊ぶことが多く、年下への思いやりが育たない。

3) 遊びの空間は原っぱや自然の残っている所が少ない。

人工公園であるので自然への発見が少ない。

4) 遊び道具も十分にでき上がったものである。

このため創造工夫の必要性がない。

等の問題点を残すが、幼児期に身体活動をすることは子どもが発育発達してゆく中で大切なことである。親との係わりの中で、色々な事柄を模倣し体験してゆくの親の役割りは大きい。親の養育態度で子どもの成長してゆく方向がゆがめられることもあるであろう。

本学で実施している講座においても親と子に何らかの成果があれば良いと考えている。子どもがよりよく育ってゆける環境づくりを考えて運営、企画、指導においてもっと充実してゆくように研究努力を重ねてゆきたい。

参 考 文 献

1. 世界の幼児教育2 「日本」
岡田正章編集 川野辺敏監修
日本らいぶらり 1983年5月
2. ホームスポーツ・シリーズ
「親と子」1985年5月 「家族」1981年8月
日丸哲也 増田靖弘 古川善夫 青山英康
ぎょうせい
3. 「親と子の体力づくり」
伊藤基記著
不味堂 1982年4月
4. 「幼児の運動文化論」
学校体育研究同志会大阪支部編集
山本秀人著他19名
あいわ出版 1990年7月
5. 「幼児の心を育てる」
金子保編集
日本文化科学社 1988年12月
6. 「自由遊び再発見」
野辺繁子 矢作邦子著
フレーベル館 1983年3月

7. 保育講座 保育内容「健康」
杉原隆 柴崎正行編
ミネルヴァ書房
8. 雑誌「体育の科学」 1985年 Vol. 35 I
特集 幼稚園での体育のあり方
日本体育学会編集
体育の科学社
9. 雑誌「体育の科学」 1990年 Vol. 40 II
特集 幼児の運動
日本体育学会編集
体育の科学社
10. 雑誌「体育科教育」 1989年10月号
特集 生涯スポーツの時代
「体育科教育」編集部
大修館書店
11. 雑誌「体育科教育」 1991年12月号
特集 子どものからだと心を点検する。
「体育科教育」編集部
大修館書店